第二十二講　小説その５　大能力と小能力

次の文章は、司馬遼太郎の歴史小説『項羽と劉邦』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、この文章の前には、劉邦の功将韓信が謀叛の罪に問われ刑殺された事件が述べられている。

韓信が刑殺されるとき、劉邦は(注)鉅鹿の太守の謀叛を討伐に行って不在だったが、帰ってきてこの天才の死を知り、おどろきあわれみ、

——死にのぞんで韓信はなにか言わなかったか。

と、問うた。劉邦には、うしろめたさがあった。韓信ほどの男が、あの乱世のなかでまがりなりにも劉邦に忠信をつくしてきたことは、この時代の人間現象としては奇跡にちかく、そのことはたれよりも劉邦自身がつよく感じていた。

が、刑吏が韓信の死の直前のことばを告げたとき、劉邦はとびあがって怒った。というよりも韓信に対してはじめて公然と怒りうる自由を得た。

——あいつは、早くから(注)叛心を抱いていたのか。

劉邦は、うしろめたさから解放された。

「蒯通という名がでたな」

かれはすぐさまその追捕を命じた。やがて小ぶとりの蒯通が縛られて都に曳かれてくると、劉邦自身が尋問した。

「おのれが、韓信に謀叛をすすめたのか」

と問うたとき、蒯通は劉邦の顔をなめるように観察してから、そうです、とうなずき、A さらに声を大きくして、

「私が教えたのです」

と、くりかえした。蒯通は覚悟していた。弁士が戦士よりもはるかに危険な世渡りであることをかれは知っていたし、すでにその当然の運命が眼前にある以上、せめて自分の名をひとびとの記憶にのこしておきたかった。

「しかしながら、かの(注)竪子（じゅし）」
韓信を小僧よばわりし、地につばを吐いた。
「わしの策を用いなかった」
「なぜだ」
劉邦は、問う。
「韓信は、一個の小僧」
「小僧はわかった」
「その小僧の内部（なか）に不世出の軍才が宿ってしまった。雀（すずめ）の体に天山を征（ゆ）く鷲（わし）のつばさがついたようなものです」
劉邦はかつて韓信が最初の謀叛の容疑でかれの前にひきだされてきたときのことを思いだした。
あのとき劉邦は韓信をいたわってさまざまの問答をした。話題がたまたま軍才のはなしになった。かつて死んだ将たちや、生きて栄爵を得ている将たちの能不（のうふ）（有能、無能）を双方が採点して、やがて劉邦が、

　このわしはどうだろう。

と、韓信にきいた。韓信は一笑して、

　陛下はせいぜい十万人程度の将でしょう。それ以上の兵力だと、とてもむりです。

といった。劉邦はそうかと思い、しかしうれしくなく、奇妙な気持ちをごまかすように両手で顔を何度もこすった。やがて手をおろして韓信に、ではお前はどうだ、ときいた。韓信は平然と、

　多多（たた）益（ますます）善（よ）キノミ（兵力が多ければ多いほどよい）。

といった。劉邦はもっともだと思いつつも、それほどの韓信が、劉邦の前に擒（とりこ）としてひきだされているのが滑稽（こっけい）で、ふしぎでもあった。百万、千万の将であるお前がなぜわしの前に曳きだされているのか、ときくと、韓信はいった。

陛下は兵に将たる能力はおありではありません。しかし将に将たる能力がおありだから私がかような姿で陛下の前にひきだされているのです。陛下の場合、天授であって、人力ではございません。

このことばは、韓信がくやしまぎれに劉邦の才能――というよりも人間そのもの――の奇妙さをことさらに表現したもので、本心から出たものであるかどうかはわからない。本心はただ陛下は御運がよかっただけです、とでも言いたかったのではないか。

劉邦は往時をおもい、眼前の蒯通を見ている。蒯通は韓信をはげしくののしって、

「あの小僧は、陛下に対して忠信すぎたのだ。わしの策を用いなかった理由はただそれだけだ。かれは自分のつばさの飛翔力（ひしょうりょく）が、もはや雀の忠信を必要としていないことを知らなかったのだ。私はそれを説いた。なぜ鷲であることをおもわないのか、と。なぜ陛下へのくだらぬ忠信をもちつづけるのか、と」

（あの当時、韓信はわしを裏切るに忍びなかったのか）

劉邦の心に韓信への愛のようなものがよみがえってきた。

「もし漢（かん）の帝国ができたところで、椋鳥（むくどり）や鵯（ひよどり）のむれのなかに鷲がまじれるか。鷲はかならず中傷されて殺されるだろう」

「おまえ、そう言ったのか」

劉邦も椋鳥や鵯のなかまになるではないか。

「いや、わしが思っているだけのことだ。しかしあの小僧の胴は雀であったためにわしの策をついに用いず、わしも後難をおそれ、(注)佯狂（ようきょう）して逃げてしまった。もしあのときあの策を用いていれば……陛下」

と、蒯通が弁士らしく威儀をただし、言葉もあらため、あなたもまたここにいま在（おわ）しませぬぞ、といったときは劉邦もさすがに腹が立ち、

「要するにお前は人のいい韓信に悪智恵（わるぢえ）をつけ、わしにそむかせようとしたのだ。おまえの反逆、まぎれもない」

と、いった。蒯通は、ちがう、といった。

「烹殺（にころ）せ」

と、劉邦は大声で刑吏に命じた。刑吏たちはすばやく裏庭へ走った。大きな青銅の釜（かま）を前庭へもち出すためであった。

蒯通は狂ったように、

「この舌の動くところを聴け」

と、叫び、烹よ、どのようにも烹よ、ただ陛下がこのわしを理に適わぬことで烹ようとしていることだけはこの世で弁じておかねばならぬ、といった。

「陛下。秦末、諸豪がむらがりおこってたれもが天下を望んだ。陛下もまたそのひとりでござった。いま陛下はさいわいに天下を獲られたが、このときにあたり、かつて天下を望んだ諸豪のすべてを反逆の罪によってこの釜にほうりこもうとなさるか」

「せぬ」

劉邦はこたえた。この無邪気とも正直ともつかぬ人の好さがこの男の身上であった。

「この蒯通は兵もなく武もなかったが、武を持つ韓信に天下をとらせようと思い、八方画策した」

「おまえもまた群雄のひとりだったというのか」

劉邦は、小柄な蒯通のみじかい手足をみて、愛嬌を感じた。

「おまえは何人の兵をもっていたか」

「舌がある」

舌はときに剣よりもつよい、と蒯通はいった。劉邦ははじめて声をたてて笑った。蒯通の警句に感心したわけではなく、手足、くびに枷をはめられて身動きもできないこの小男が、ただ舌だけを動かし、ときに顔から突きだして見せ、ひっこめては喋り、まことにせわしない様子がおかしかったのである。

「まだ喋ることがあるか」

「烹られるまで喋るだろう。陛下は盗跖をご存じか」

「古の大盗だ」

「盗跖にも飼い犬がいた。それが堯（古の聖王）にむかって吠えた。その犬をもって不仁であるとし、反逆であるとされるか。犬はすべて飼いぬし以外の者には吠えるのだ」

「おまえは、盗跖の犬か」

「小僧の犬だ」

蒯通がいったとき、劉邦は一笑して刑吏に蒯通の枷をはずさせ、郷里まで帰る旅費もくれてやるように命じた。

蒯通は、庁舎を出た。門前に(注)喃（なん）が待っていた。

D「死んだほうがましだった」

地に洟（はなみず）を投げすて、天下を動かすために弁論を学んだのに、たかがおのれの命をすくうために役立っただけだ、とつぶやいた。

(注)
○鉅鹿の太守――現在の中国河北省南部にあたる地域を治めた長官。
○叛心――謀叛を起こそうという考え。
○豎子――青二才の意。人を軽蔑していうことば。
○佯狂――いつわって狂気を装うこと。
○喃――蒯通が使っていた召し使いの少女。

問１　傍線部Ａ「さらに声を大きくして、……と、くりかえした。」には、蒯通のどのような意図があるか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

① 事件の張本人は自分だということを示し、韓信の名誉を守ろうとしている。
② すでに死が明らかな状況ではあるが、ひとまず相手をけん制しておこうとしている。
③ 自分の生死を左右する力をもつ劉邦に対して精いっぱいの釈明をしようとしている。
④ 韓信が本当に信じ、頼りにしていたのは自分であることを訴えようとしている。
⑤ 韓信に天下をとらせようという計略は自分の発想であることを印象づけようとしている。

問２　傍線部Ｂ「劉邦の才能――というよりも人間そのもの――の奇妙さ」とあるが、ここでいう「奇妙さ」とはどのようなことを指して言うのか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　劉邦は、兵隊を指揮する能力はあまり高くないが、その兵隊たちを動かす韓信などの優秀な将軍を指揮する能力や魅力が自然と備わっていたのは奇妙であった。

②　劉邦は、戦士としては優れてはいなかったが、将軍としては将軍にふさわしい能力をもっており、人間の及ばない、もって生まれた奇妙さがあった。

③　劉邦は、兵隊を指揮する能力はなかったが、将軍としての能力は彼より高かった韓信を知らぬまに虜（とりこ）としてしまうほど、不思議な才覚があった。

④　劉邦は、一兵卒から見て将軍としての魅力はなかったが、将軍としては将軍の中の将軍と言えるほどの能力を天から授かっていたというのは、不思議なことである。

⑤　劉邦は、兵隊を指揮する能力は高くなかったのに、将軍たちに君臨できたのは、人間という存在に天が悪戯（いたずら）したとしか思えないほど奇妙なことである。

問３　傍線部Ｃ「それ」の内容を具体的に説明したものとして最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　韓信がささいな忠信の気持ちを持ち続けることは、天下を取った劉邦にとって、もはや煩わしいだけだということ。

②　韓信が真に忠信の人であるためには、蒯通の策をうけいれ、より高い視点からものを見ようとすべきだということ。

③　真の忠信を尽くしたければ、韓信は劉邦につまらぬ気づかいをせず、自分の信念を迷わず実行すべきだということ。

④　韓信ほどの実力があれば、劉邦の臣下であることに甘んじることなく、自らが天下をねらえばよいということ。

⑤　韓信ほどの実力者であれば、天授に頼る劉邦の軍略など恐れる必要はないということ。

問４　傍線部Ｄ「『死んだほうがましだった』……つぶやいた。」の部分には、蒯通のどのような思いが表れているか。その内容として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　天下をねらった韓信が挫折(ざせつ)して殺された以上、おめおめ生きのびた自分が恥ずかしく、自分もともに潔く殺されてしまいたかった。

②　人のよい劉邦をあざむいて反逆しようとしたことが今では後悔され、また保身のためさらに詭弁(きべん)を用いた自分があさましい。

③　弁論で天下を動かすつもりの自分だったのに、その弁舌が結果として劉邦を翻意させる程度のものでしかなかったことが情けない。

④　弁舌で天下を動かすつもりで弁士として生きてきたのに、弁論は結局権力者の武力に勝てない無力なものであったことが悔しい。

⑤　幸いにして命だけは助かったが、もはや自分の弁舌を売り込む相手もなく、郷里にひきこもって生きることに何の希望ももてない。

第二十二講　知識モノ解説

文学史

●司馬遼太郎（しば　りょうたろう　一九二三～一九九六年）歴史小説家
代表作品『坂の上の雲』『竜馬がゆく』『街道をゆく』

語句

不世出＝ふせいしゅつ→めったにないほどすぐれた
後難＝こうなん→あとになって降りかかってくる災難
八方＝はっぽう→あらゆる方向
cf八方塞がり＝はっぽうふさがり→どの方向にも支障があり、手詰まり
八方美人＝はっぽうびじん→どこから見ても美人／みんなに如才（じょさい）なくいい顔をする
画策＝かくさく→実現をめざしてあれこれ計画をすること
詭弁＝きべん→こじつけの議論・相手をあざむいたりごまかす議論
翻意＝ほんい→考えを変える

復習問題　第二十二講

問１　次の語句の意味として最も適当なものを、次の各群のうちからそれぞれ一ずつ選べ。

（ア）不世出の
①　めったに現れることのないほどの、優れた
②　少しの人にしか知られていない、一風変わった
③　めったに世の人の目に触れない、不思議な
④　口にだして言うこともできないほどの、不気味な
⑤　まだ世間に出ていないが、将来性のある

（イ）後難をおそれ
①　後々まで長く自分への非難が続くことを気にして
②　あとから非難が起こらないように気をつかって
③　後になるほど事態の解決が難しくなるのを心配して
④　後になってふりかかってきそうな災いを心配して
⑤　後になるほど災いが起こりやすいのを気にして

（ウ）八方画策した
①　あらゆる方面に出向いて、自分の立てた計画を話した
②　あらゆる方面にはたらきかけて、計画の実現をはかった
③　あらゆる方面から情報を集め、さまざまな計画を立案した
④　いろいろな計画をねりあげて、いちばんよいのを実行した
⑤　いろいろな計画を人々から提出させ、どれがよいかを討議した

第二十二講　小説その5　大能力と小能力

《本文の対比構造》

主役

それぞれの大能力＝

劉邦（りゅうほう）……天下人・将軍を率いる力

韓信（かんしん）……軍人・将軍としての能力

蒯通（かいとう）……弁論人・天下を動かす策

↕ **主な対比**

敵役

それぞれの小能力＝

劉邦……兵を率いる将軍としての力

韓信……自分自身が天下をとる能力

（結局は、劉邦への忠信に終わる）

蒯通……自らの命を救うに過ぎない能力

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

蒯通が、自らの大能力を誇るシーンです。本文の傍線Dとは際立ったコントラスト・対比・対照ですね。したがって⑤が正解です。①は「韓信の名誉」が×です。自らの策の優秀さに対して韓信を「小僧よばわり」して馬鹿にしています。記述に反する誤りです。②の「ひとまず」、③の「精いっぱいの釈明」、これでは大したことない小能力になってしまいます。これを対比混乱の誤りと呼ばずして他に何と呼ぼう！「小説も対比がわかることが読解力なんだよ」と問題制作者が語りかけてくるようです。④「韓信が〜頼りにしていたのは自分（蒯通）」が×です。韓信は結局のところ劉邦にこそ従順であったのです。韓信が蒯通の策を用いなかったことからも記述に反する誤りです。

問２《傍線部説明・選択肢》

劉邦の大能力と小能力を一度に問うています。劉邦のような天下人にもそうした才能の二面性のあることとの「奇妙さ」をダイレクトに設問にしています。したがって①が正解です。②は「戦士として」がまず小能力の説明つまり記述に反しています。「将軍として」でなくてはなりません。また後半の大能力で「将軍として」とやってしまい、典型的な対比混乱の誤りを犯しています。③は「兵隊を指揮する能力はなかった」が×です。小能力であって無能ではありませんよね。たしかに「陛下は兵に将たる能力はおありではありません」とありますが、これは「せいぜい十万人程度の将」の言い換えであって文字通り「能力がない」と解釈しては誤りです。記述に反する誤りとも言えますし、「有能⟷無能」を比べているかのような正しい対比喪失の誤りと呼んでもよいです。また後半の「知らぬまに」も×です。魔術師か！　妖術師か！　催眠術師か！「知ってか知らずか」は対比ではない。これまた正しい対比喪失の誤りです。④は、小能力部分で、また「なかった」としてしまい③の前半と同じ誤りです。後半の大能力では「将軍として」で②と同じ誤りです。⑤は「天が悪戯したとしか思えない」が×です。「しか」が不当な限定とも言えますし、本文の「天授」は生まれもっての能力（人力ではない、つまり努力の成果ではない）ということです。イタズラをなすような文字通りの「天」がいるわけではありません。比喩を文字通りに解釈した誤りと言えます。

問３《指示語・選択肢》

この指示語は、韓信の大能力および、それを使って天下をねらえるという可能性を指しています。したがって④が正解。①②③の「忠信」はすべて小能力の方です。つまり対比混乱の誤り。また①の「劉邦にとって〜煩わしい」も×で、むしろ「愛すべき」でしょう。記述に反する誤りです。また②の「高い視点」は「鷲」などの鳥の比喩を文字通りとってしまった誤りです。しらじらしー！　⑤は「劉邦の軍略」が間違いです。劉邦について恐れるべきものは、軍才ではなく、将軍たちを束ねる力であったはず。この点が対比混乱の誤りです。

問４《傍線部説明・選択肢》

蒯通の大能力と小能力の対比、とくに結局は小能力におわってしまったというシーンです。③が正解です。①は「おめおめ⟷潔く」が正しい対比喪失の誤りです。「ずるずる長々⟷スパッとシンプル」なんてことは一切比べられていません。こうして何が正しい対比かがわかれば、間違いの選択肢がどのようなものかクリアカットに見えてくるでしょ。②は「詭弁（ごまかし）」が×です。能力が小さかったということで、ずるがしこく立ち回ったということではありません。記述に反する誤りです。また「人のよさ・正直さ⟷ずるさ」という点では正しい対比喪失の誤りといえます。④の「弁論は結局権力者の武力に勝てない」が典型的な不当な一般化です。蒯通個人の小能力の露呈であって、「広く一般に、そもそも弁論は〜」ということではありません。⑤は「幸いにして命だけは」がすでに×です。「死んだほうがまし」の記述に反します。もし処刑されていたならば、それは天下を動かすほどの大能力を認められたということです。生かしておくと危険なほどの大人物だ、ということになるからです。さらに「相手もなく」も×ですね。正しくは自分の能力が大きくなかったのです。記述に反する誤りです。

模範解答

問１＝⑤　問２＝①　問３＝④　問４＝③

復習問題解答　第二十二講

（ア）①

（イ）④

（ウ）②